

## 日常生活における自立意識調査

—長野県北信地方の小学校・中学校・高等学校・大学における実態調査—

三野たまき 信州大学教育学部 生活科学教育講座

霜田 里美 長野市立浅川小学校

塩入 純子 長野市立裾花中学校

大熊恵美子 長野県立飯山南高等学校

キーワード：日常生活，生活の自立度，アンケート調査，一人暮らし

### 1. はじめに

戦前の家庭科は家事及び裁縫の技能教育が中心で、「婦徳の涵養」という道德教育を込めた我が国独特の女子教育の姿がそこにあった。これにより「富国強兵」策で貧しかった国民の生活水準に疑いを差し挟まず、天皇制的家長制度を基軸とした封建的「家」制度を、道徳的に女子に身につけさせる国家のねらいがそこにあった。それが戦後GHQの五大改革指令に取り上げられた「教育の民主化」や「婦人の解放」の中で、家庭科教育の行方は大幅に進路変更されるものとなった。そんな中で昭和22年、「家事・裁縫の合科ではない、技能教科ではない、女子教科ではない」新生「家庭科」が誕生した<sup>1)</sup>。ところがこの新生「家庭科」は、理念や教育課程上の位置づけが必ずしも統一されていなかったもので、実際の男女共学が徹底できたのは小学校のみで、中学校は職業科と並置、高校は選択という形でスタートを切ることになった。その後スプートニック・ショックによる科学技術振興の嵐が教育行政に及び、能力・特性による教育が産業界から養成された。中学校「職業・家庭科」が「技術・家庭科」と変更され、(技術・家庭科の男女共学を推進への動き<sup>2)</sup>もみられた)男女別学の指定と技能主義の強化へと方向転換した。これにより家庭科の存在は希薄化し、高校家庭科も「一般家庭」を女子さえ選択しない状況<sup>3)</sup>が続いた。このようなあいまいな状況を一変させたのは高度経済成長に伴う国の家庭対策であった。「夫は仕事、妻は家庭」という役割分業が戦前の思想と相俟って、昭和45年高校学習指導要領の「家庭一般」を昭和48年度から4単位女子完全必修にする告示へと至った。これに対応する男子の科目は体育と決まった。

このような国の方針が全く批判無くそのまま実施されたわけではなかった。京都府立高等学校では昭和48年に府立全校で男女共修を実践するに至った。また東京都高等学校教職員組合でも、昭和47年に男女共修思案を発表し、わが長野県でも長野県高等学校教職員組合が自主教科書を作って同年度から実施可能な学校から実践に移した。このような現場の教員のたゆまぬ努力の末に、高等学校新学習指導要領の男女4単位必修<sup>3)~5)</sup>が平成元年に告示され、平成6年に本格導入が実施される時代を迎える。さらに、これが第15期中教審の「子どもに生きる力とゆとり教育」の提言が引き金となって、小・中・高校ともに授業時間数の削減が行われた。その結果、高等学校では「家庭基礎(2単位)」、「家庭総合(4単位)」、「生活技術(4単位)」のいずれか1科目必修の事態に至っている。

小学校から高校までの学習指導要領における家庭科は、「衣食住」を中心とした学習領域と「家族と家庭生活」を中心としたそれとから成り立つ。「衣食住」は「人の一生と家族・福祉、衣食住、消費生活などに関する基礎的・基本的な智恵と技術を習得させ、家族生活の充実向上を図る能力と実践的

な態度を育てる」ことを目標とし、一方「家族と家庭生活」では、「人の一生を生涯発達の視点でとらえ、家族や家庭生活の在り方、乳幼児と高齢者の生活と福祉について理解させ、男女が相互に協力して、家族の一員としての役割を果たし家庭を築くことの重要性について認識させる」ことを目標とする。この時間数の削減に直面しながらもこれらの目標を達成するためには、我々家庭科教員のたゆまぬ努力が必要とされるであろう。このような時代の中で家庭科教育を受けてきた児童・生徒・学生にどのような「生きる力」がついているかを知ることがを目的とし、長野県の北信地方の小学生から大学生を対象とした日常生活の自立度についてアンケート調査<sup>6)</sup>を行った。現在の児童・生徒・学生の日常生活の自立度に関する実態を把握するとともに、家庭科教育がいかに児童・生徒・学生の自立度に影響を及ぼしているかを明らかにすることを目的とした。

## 2. 調査方法

調査対象は、小学校3校（6年生）の男子83名、女子81名（小計164名）、中学校1校（2年生）の男子40名、女子40名（小計80名）、高等学校3校（1年生）の男子93名、女子66名（小計159名）、家庭科の教員養成課程の大学2校（2年生～4年生）の75名（女子のみ）の計480名に対し、「日常生活の自立度」のアンケート調査を行った。調査実施期間は平成16年6～7月であった。調査項目の詳細を表1に示す。また、表1の「5段階評価」と記載された項目に関しては、項目30に示したように、その達成度を5段階評価させた。「男/女」、「Y/N」の項目は、男女の区別、「はい」:(Y)か「いいえ」:(N)を申告させた。なお、大学生ではこれらの項目以外に自宅通学か否か、家庭科の教員になるために自分に付けなくてはならない知識や技能の項目を加えた。一方、小学生では「一人暮らしへの自信」についての質問項目を省略した。配布総数480部、回収率100%、有効回答数は478部(99.6%)であった。

## 3. 結果

### (1) 集計結果

表1に示した調査項目の内、5段階評価した項目の結果を図1に示す。どの図も下から上にかけて、小中高大学の順に示す。なお、大学生は自宅通学か否かのグループに細分した結果も合わせて示した。その特徴的な項目について、以下に述べる。

### (2) 「自分で起きる」について

例えば「あなたは朝、人に起こされなくても自分で起きますか」の質問（表1の2項、図1・1A参照）に対して、「いつも起きる」、「だいたい起きる」、「半々程度起きる」、「ほとんど起きない」、「全く無理である」の5段階評価で回答させたところ、「いつも起きる」と回答した割合は、小学校では14.0%、中学校28.8%、高校28.3%、大学54.7%であった。このことから、小学生ではまだ人に起こしてもらおう児童の割合が多く、牧野らが行った全国調査結果（小学6年生20.4%）<sup>7)</sup>と比較すると、若干低い結果となった。しかし中高生のそれはほぼ同様な結果（中学2年生24.9%、高校2年生29.9%）であった。また、大学生は小中高校生と住居形態が異なる、自宅から通学していない、つまりアパートや寮に住んでいる学生が約半数以上いた。そこで、これを2グループに分け集計し直すと、自宅の大学生では27.6%、そうでない学生は71.7%が「自分で起きる」と回答した。つまり、大学生であっても自宅に住んでいる学生が自ら起きる割合は、中・高生と変わらないことが分かった。

自分で起きると答えた者を除き、これを100%とした時の、「誰に起こしてもらおうか」の質問に対

表1 日常生活における自立度調査

調査項目	評価法
1. 性別	男/女
②. あなたは朝、人に起こされなくても自分で起きますか。	5段階評価
3. 「いつも起きられる」と答えた人以外は、主に誰に起こしてもらいますか。	自由筆記
④. 朝、起きてからでかけるまで何分くらいかかりますか。	5段階評価
⑤. 自分から家族に「おはよう」、「ありがとう」など声をかけますか。	5段階評価
6. 自分の部屋を持っていますか。	Y/N
⑦. 自分の部屋や自分の物を置いてある場所の掃除は自分でしますか。	5段階評価
8. 「いつも自分で清掃する」と答えた人以外の人は、主に誰に掃除してもらいますか。	自由筆記
⑨. 「燃えるゴミ」、「燃えないゴミ」、「ペットボトル」などを分別して捨てていますか。	5段階評価
⑩. 自分の布団の上げ下ろし、あるいはベッドメイキングを自分でしていますか。	5段階評価
11. 「いつも自分です」と答えた以外の人、主に誰にしてもらいますか。	自由筆記
⑫. 自分の寝具の手入れは自分でしますか(布団を干したり、カバーを取り替えたりする)。	5段階評価
13. 「いつも自分です」と答えた以外の人、主に誰にしてもらいますか。	自由筆記
14. 家の中で自分が分担する仕事がありますか。	Y/N
⑮. 自分の小遣いや1ヶ月に使うお金がいくらかわかりますか。	5段階評価
⑯. 通学前に衣服や持ち物を自分で用意しますか。	5段階評価
17. 「いつも自分です」と答えた以外の人、主に誰にしてもらいますか。	自由筆記
⑰. 自分が着た服は自分で洗濯していますか。	5段階評価
19. 「いつも自分です」と答えた以外の人、主に誰にしてもらいますか。	自由筆記
⑳. 季節の変わり目の衣服の入れ替えを自分でしますか。	5段階評価
㉑. ボタンが取れたとき自分でつけますか。	5段階評価
22. 「いつも自分です」と答えた以外の人、主に誰にしてもらいますか。	自由筆記
23. 毎日朝食をとりますか。	Y/N
24. 朝食は誰と食べますか(複数回答可)。	自由筆記
㉒. 家族の食事を自分で作りますか。	5段階評価
㉓. 食料品の買い物をする時に「値段」だけでなく「賞味期限」や「添加物」に注意しますか。	5段階評価
㉔. 食後、自分の食器の片づけをしますか。	5段階評価
28. 友達や家族に作ってあげることのできる料理がありますか。	Y/N
29. 「はい」と答えた人にお聞きします。それは、どんな料理ですか。	自由筆記
⑳. あなたが一人暮らしをするとして家事能力を考えた場合、 ア：自身を持って独り立ちできる    イ：不安もあるがだいたい独り立ちできる ウ：かなり不安があるので、どちらとも言えない    エ：ほとんど独り立ちできない オ：全くできない	5段階評価

する回答を図2に示す。どの学年であっても「母親」が最も高く、特に中学生では95.7%の生徒が母親と回答した。これは「寝具の用意や手入れ・洗濯・衣替え・ボタン付け」(図1・1G~J参照)、「食事の支度」(図1・2C参照)にも共通した結果で、自分で行わないときにはどの学年であって

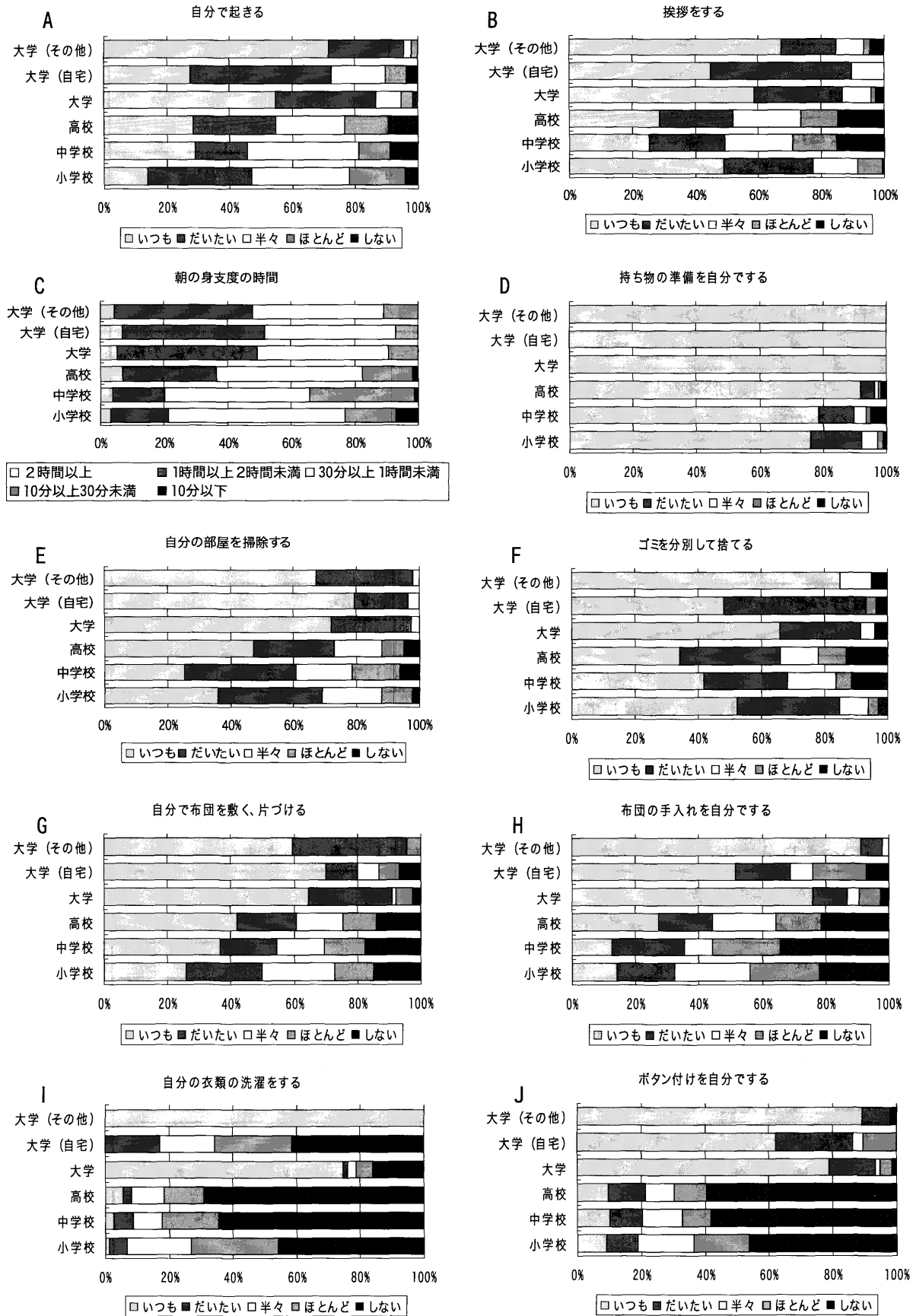


図 1. 1 5段階評価項目の集計結果 (その1)

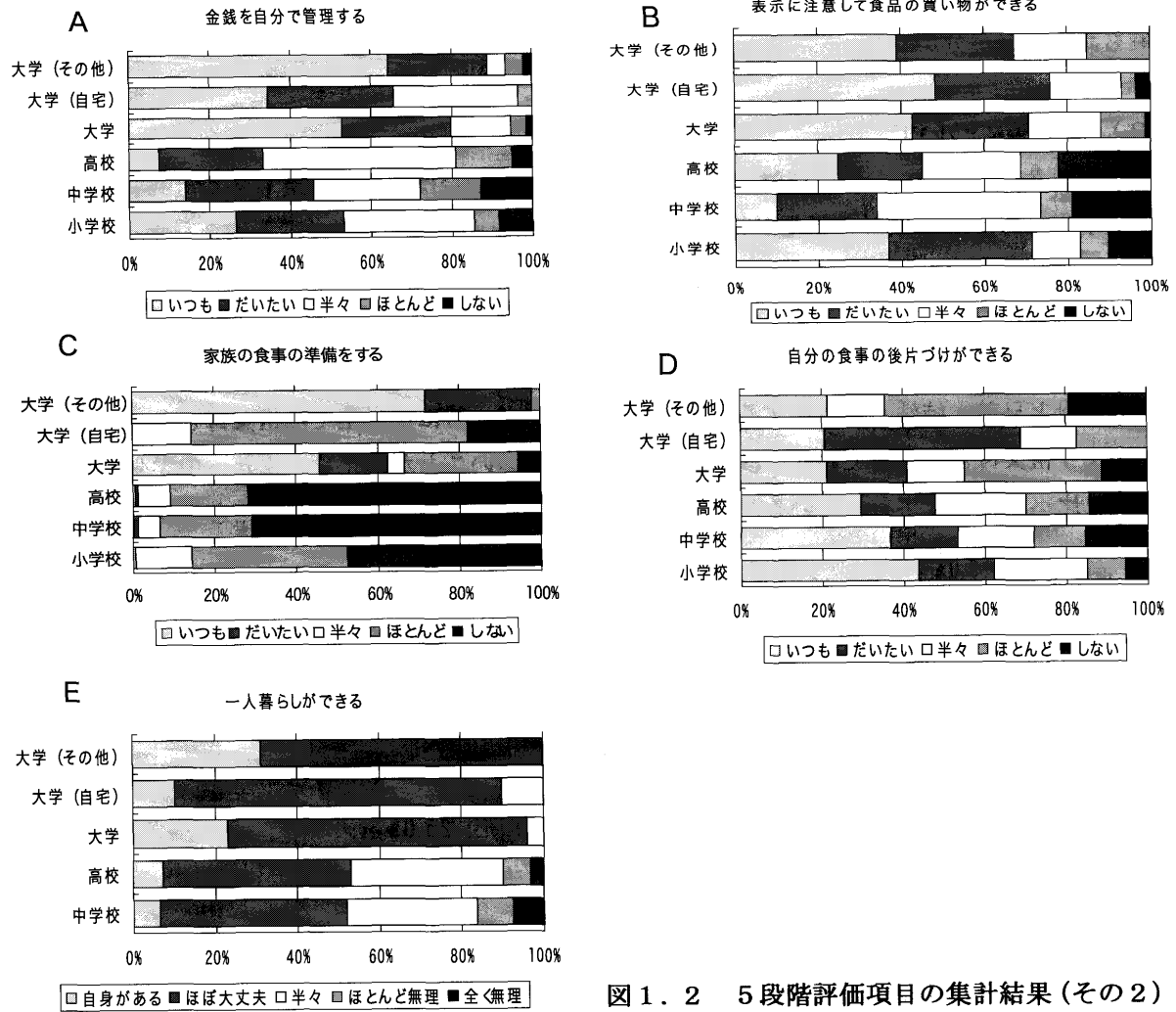


図 1.2 5段階評価項目の集計結果(その2)

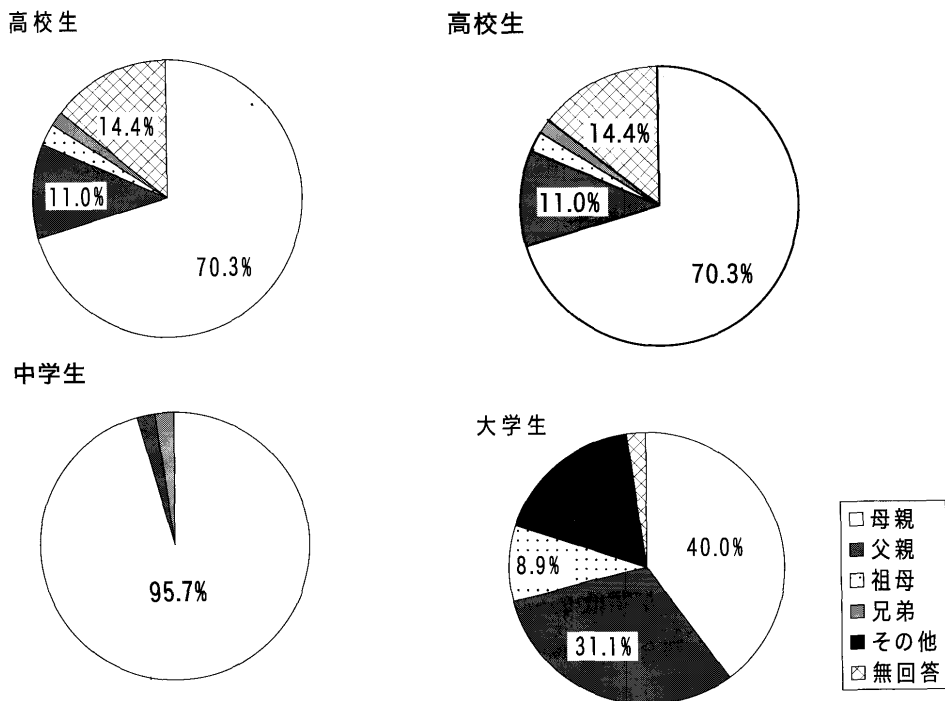


図 2 「誰に起こしてもらおうか」の回答結果

も、母親が行う割合が最も高かった。つまり、どの学年であっても、他の家族に比べ母親への依存度が最も高いことが分かった。

### (3) 食生活について

「朝食を食べますか」の質問に対して「はい」と答えた割合は中学生で最も多く（95%）、最も少ない大学生であっても85%の学生が朝食を食べていることが分かった。「誰と朝食を食べるか」の回答結果を図3に示す。

個食の割合を見ると、一人暮らしの大学生を除いた場合、小・中・高校生は順に、13%、30%、4%であった。このように中学生の個食の割合が3割を超えることがわかった。これはどのグループであっても父母と兄弟・姉妹と食事をする児童・生徒が多いが、特に中学生では祖父母と食べる機会がない、つまり祖父母と同居していない核家族化した家庭が多いことが伺える。また、中学生は小学生・高校生に比べ両親と食事をしている割合も少ないことから、共働き家庭が多いことも伺える。

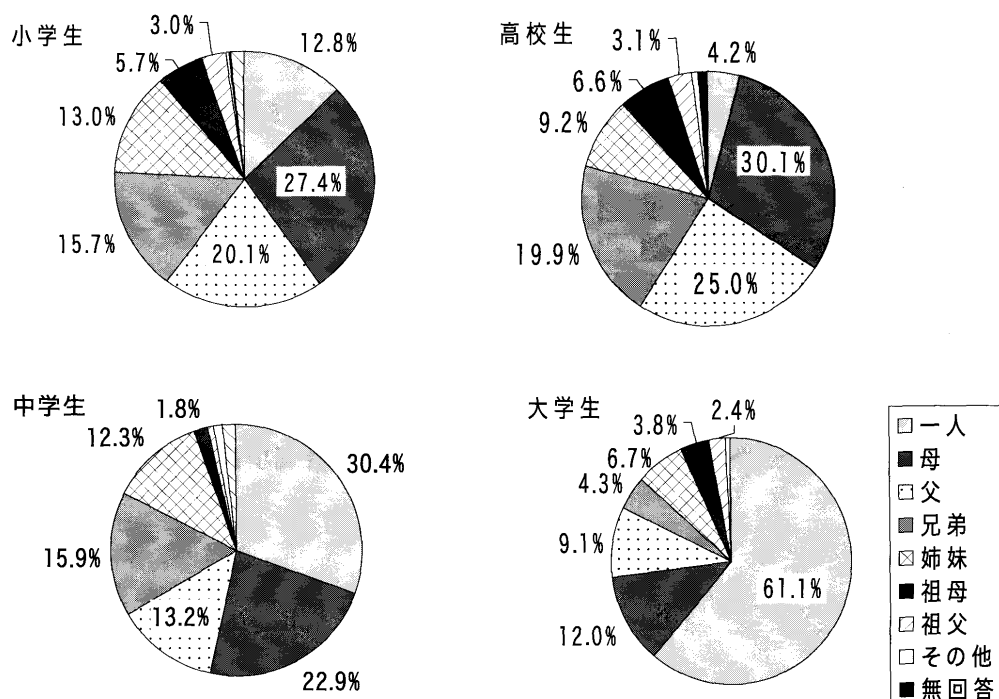


図3 「朝食を誰と食べますか」の回答結果

「家族の食事の準備をしますか」の質問に対する回答（図1. 2C）結果から、小・中・高校生ともに「しない」が半数以上、「ほとんどしない」を加えると8~9割の児童・生徒が家族の食事の準備をしていないことがわかった。また、大学生であっても自宅の学生の8割以上が同様に家族の食事の準備をしないことがわかった。一方、「食事の後片づけをしますか」についての回答（図1. 2D）より、自宅以外の大学生を除いて半数以上の回答者が食事の後片づけをすることがわかった。つまり、食事を作ると後片づけをせず、食事を作らなければ後片づけをする児童・生徒・学生の姿が伺えた。

さて、「家族や友人のために作れる料理があるか」の質問に対して、ほとんどの大学生はあると答えたが、小・中・高校生では男子は6割、女子は7~8割の児童・生徒が「ある」と答えた。また、高校生は小・中学生に比べ家事を行なう割合が低かった。それは、高校生になると学区域が広範囲となるために登校のための時間がかかり、部活動の時間、大学受験等を控えて生活時間に余裕がないことに起因していると考えられた。

家族や友人に作ってあげられる料理名を自由回答させた結果の内、上位 10 位までのそれを表 2 に示す。小学生から大学生までを通して回答された料理は、「カレー、みそ汁、チャーハン」で、どれも小中学校で学習する料理であった。また、小学生では「ごはん」や「卵」（卵料理は目玉焼き、卵焼き、ゆで卵、炒り卵と卵単独の料理のバリエーションを料理として挙げている）を単独で使った料理名がそ

表 2 家族や友人に作ってあげられる料理名

順位	学年	小学校	中学校	高校	大学
第 1 位		目玉焼き	カレー	チャーハン	カレー
第 2 位		卵焼き	チャーハン	卵料理	オムライス
第 3 位		カレー	クッキー	カレー	全般
第 4 位		野菜炒め	みそ汁	オムライス	ハンバーグ
第 5 位		サラダ	ハンバーグ	スパゲッティ	スパゲッティ
第 6 位		みそ汁	卵焼き	みそ汁	チャーハン
第 7 位		チャーハン	オムライス	野菜炒め	肉じゃが
第 8 位		ゆで卵	目玉焼き	焼きそば	シチュー
第 9 位		炒り卵	炒り卵	ホットケーキ	みそ汁
第 10 位		ごはん	サラダ	サラダ	餃子

れぞれ挙げられていた。中学校以降では卵焼きに炒めたごはんを合わせたオムライスや菓子等が挙げられ、単独であった食材が取り合わされた形の料理となった。また、料理法も「炒める」あるいは「焼く」の単独の調理法を組み合わせた、複合調理法へと発展していた。高校生ではこれらスパゲッティのような麺とソースを使った料理が加わり、大学生ではどんな料理でも作れると答えた学生が約 25%いた。ただし、この割合は彼女らが家庭科教員養成課程の学生で日頃から調理に関する知識や技術の向上に心がけている学生あることから、一般的な大学生においては望めない数値であると考えられる。このように、家族や友人に作ってあげられる料理名のほとんどが、家庭科で教わった教材であることがわかった。

(4) 各グループ間の有意差 (男女差、学校間の差)

達成度を 5 段階評価した (表 1 参照) ①起きる、②身支度の時間、③挨拶、④部屋の掃除、⑤ゴミの分別、⑥寝具の用意、⑦寝具の手入れ、⑧小遣いの管理、⑨持ち物の準備、⑩衣服の洗濯、⑪衣替え、⑫ボタン付け、⑬食事の支度、⑭食品の買い物、⑮食事の後片づけの 15 項目を用いて、男女差・学校間の差を検討した (任意抽出した同数のデータを使用。paired t-test)。

小学校 3 校、高校 3 校間の児童・生徒間でそれぞれの学校ごとに男女間の差を求めたところ、有意な差がなかった。また中学校 (1 校) においても有意な男女差がなかった。また同様に学校間の差を求めたところ、小学校 (3 校間)、高校 (3 校間)、大学 (2 校間) のそれぞれにおいて、学校間の有意な差は認められなかった。このことから、各小学校、高校大学間の児童・生徒・学生の自立度には有意な差がなく、男女差も無いことがわかった。

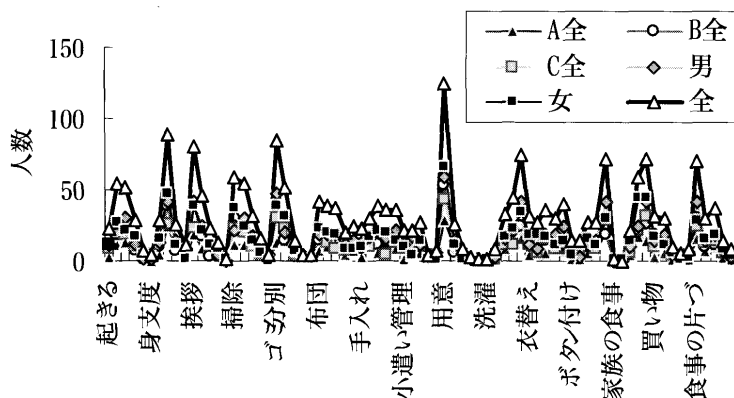


図 4 5 段階評価した結果の頻度分布図

### (5) 各グループ間の相関関係

3 (4) で作成した達成度を5段階評価した結果に、それぞれの項目の無回答者数も加えて頻度分布図を作成した。その一例を図4に示す。ここには3小学校(凡例はA~C校と表示)それぞれと、男女別、全体の平均値を示した。それぞれのグループの組み合わせ間で相関係数を算出したところ、小学校における相関係数は、どの小学校間でも有意な相関関係があった( $\alpha \leq 0.01$ )。これをさらに男女別のグループに分けて検討しても同様な結果が得られたことから、3校の小学生の自立度のアンケート結果はどのグループの結果もよく似ており、また男女差のないことがわかった。このようにして中学校、高校、大学を検討したところ、男女間(小・中・高校間)、各学校間(小学校3校間、高校3校間、大学2校間)ともに有意な正の相関関係が認められた。

次に、小・中・高・大学間における相関算出し、その結果を表3に示す。小・中・高校間では、どの組み合わせにおいても、有意な正の相関関係があった( $\alpha \leq 0.01$ )。しかし、大学と高校間では有

表3 小・中・高・大学間の相関関係

\*\* :  $\alpha \leq 0.01$ , \* :  $\alpha \leq 0.05$

判定	小学校	中学校	高校	大学	大学(自宅)	大学(その他)
小学校	—					
中学校	**	—				
高学	**	**	—			
大学	*		**	—		
大学(自宅)	**	**	**	**	—	
大学(その他)					**	—

意な相関関係があるものの( $\alpha \leq 0.01$ )、大学と中学校との間では有意な相関関係がなかった。さらに大学2校をそれぞれ中学校と検討した結果、A大学では小・中・高校間との間に有意な相関関係(どの組み合わせも $\alpha \leq 0.01$ )があったが、一方B大学と小・中・高校間では有意差が認められなかった。この結果は、先に述べたA大学とB大学の有意差がなかった事実と有意な相関関係があった事実と矛盾するように見えた。

さて、A大学とB大学の違いについて自宅通学しているか否かに着目したところ、A大学では回答者の約7割が自宅通学者であったが、B大学では6割強の学生が自宅から通学していなかった。そこで、グループの分け方を大学別ではなく、自宅通学か否かのグループに分けて再検討した。すると、自宅通学者の頻度分布図は小・中・高校生と有意な相関関係がある( $\alpha \leq 0.01$ )が、自宅通学者でない学生のそれは、自宅通学者の大学生とは有意な相関関係がある( $\alpha \leq 0.01$ )にもかかわらず、小中高校生とは有意な相関関係がないことがわかった。つまり、大学生であっても自宅から通学している学生は、小・中・高校生とよく似た頻度分布図を持つことが分かった。

### (6) 自立度

小学生を除く中・高・大学生における「一

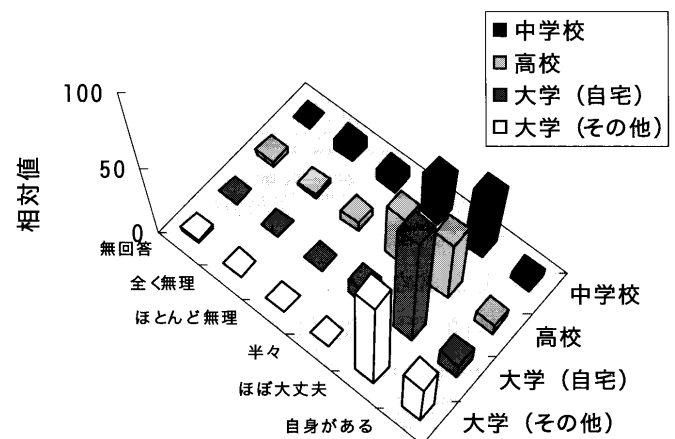


図5 「一人暮らしに自信がある」の頻度分布図



人暮らしに自信があるか」の回答結果を図5に示す。

中、高、大学へと学年が進むにつれ、自信があると答える回答者が多くなった。しかし、自宅通学の大学生に関しては、「自信がある」と答えた割合は、中・高生に比べて著しく多いとは言えなかった。

表4 各調査項目間の相関関係

\*:  $\alpha \leq 0.05$ , \*\*:  $\alpha \leq 0.01$

判定	学年	②	④	⑤	⑦	⑨	⑩	⑫	⑮	⑯	⑱	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘
学年	-																
②	**	-															
④	**	**	-														
⑤	**	*		-													
⑦	**				-												
⑨	*		*	**	**	-											
⑩	**	**		**	**	**	-										
⑫	**	**		**	**	**	**	-									
⑮	**		*	*	**	**	**	**	-								
⑯	**	**	*		**	**	**			-							
⑱	**	**		**	**	**	**	**	**	**	-						
㉓	**	**		**	**	*	**	**	**	**	**	-					
㉔	**	**	*	**	**	**	**	**	**	**	**	**	-				
㉕	**	*	*	**	*		**	**			**	**	**	-			
㉖	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	**	-		
㉗	**	**		**	*	*	**	**	**	*	**	**	**	**	**	-	
㉘	**	**	**	**	**	**	**	**	*	**	**	**	**	**	**	**	-

各項目間の相関関係の判定結果を表3に示す。各項目は表1に示す項目番号に相当する。表に示したものの判定結果も全て正の相関関係があった。このことから、どの調査項目であっても学年が上がる（年を取るにつれ）「いつもする」方へ回答したことがわかった。さらに、3（4）で述べたどの項目も自立度があがる程「いつもする」と判定していた。

#### 4. 考察

平成元年に告示された高等学校第6次改訂により、高等学校では「家庭科」が男女必修科目とされ、平成6年には高等学校新学習指導要領本格導入が実施され、男女4単位必修時代から早や十年が過ぎようとしている。そんな中で本アンケート調査では様々なことが明らかになった。例えば、3（4）・（5）に述べたように、男女差が見られないことが大きな特徴となっている。

家事分担の有無を図6に示したが、中学校では若干女子の方が男子に比べて家事分担が「ある」と答えた生徒が「無い」と答えた生徒より多くなってはいるが、小学校と高校ではかえって女子の方が家事分担をしていない。また、いずれにせよ小学校から高校へかけて家事を行わなくなる生徒が多くなり、高校生の生活時間の余裕のなさが伺える。これが大学（女子のみ）では若干回復する傾向があるが、彼女らが家庭科教員養成課程の学生であることを考えると、大学生になって生活時間にゆとり

ができたからと言って決して楽観できない。男女差が無くなったことが喜ぶべき事実ではなく、図5を見る限りでは家事から男女ともに遠ざかり、男女ともに自立できない若者の姿がそこに伺える。一人暮らしをしている家庭科教員養成課程の大学生の中に「一人暮らしへの自信」に答えることのできなかった学生が2名いた。この2名の学生を今後どのように指導していくかが、むしろ大変な問題と考えられる。

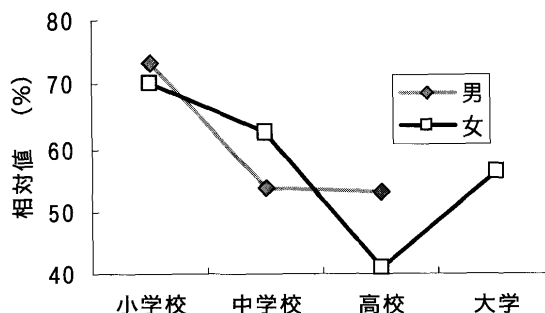


図6 家事分担の有無

彼女らが自分に最も不足していると考えている知識や技術についての自由記回答は被服 (30.6%)、食物 (28.2%)、保育 (7.1%) が挙げられた。これらの教科はどれも実習を含む領域であるので、己の技術力の不足を感じていると考えられる。また、「家族関係」については特に小・中学校でどのように教えたら良いかわからないという回答 (5.9%) が多く、生活全般に関する知識と技術、専門知識と技術、教授法 (それぞれ 5.9%) についても不足を感じているようだ。また、大学で最も教わりたい知識や技術として、被服 (22.6%)・食物 (21.3%)・教授法 (17.4%) が全体のほぼ6割を占めていた。家庭科をどのように具体的に児童・生徒に教えたらよいのか真摯な態度で考える学生の姿がそこに見られた。生活に密着した家庭科の基礎知識、専門性、家庭科の意義といった家庭科全般に対する知識と技術も挙げられていた。これらの学生の実態を踏まえ、我々が如何に学生諸氏を育て、次代の児童・生徒の指導に生かせるかが、今後の我々の課題である。

本アンケート項目は自立度を調べるに当たって質問項目に若干の偏りがあり、十分であるとは言い難い。しかし表4からも明らかなように全ての項目と有意な正の相関関係 ( $\alpha \leq 0.01$ ) があることから、ある程度の信憑性はあると確信している。つまり、長野県北信地方の児童・生徒・大学生の自立度は年を取るにつれ上がるが、自宅通学の大学生は小中高校生の自立度とあまり変わらないことがわかった。つまり、一人暮らしができるという自信は、年を取るにつれてきてくるが、大学生であっても、実際に一人住まいになって初めて確立されてくるものと考えられた。児童・生徒・学生は母親への依存率が高く、本質問項目からもわかるように、家事の中には「食事の支度」や「洗濯」など、家族それぞれが行うよりも一度に誰かが行うことが多いものがある。その担当者が多くの場合母親であり、それが依存度を上げる結果となった。また、図6に示したように小学生では家事を手伝っていても生活時間のゆとりのなさからか、高校生になるまでに徐々に手伝いをしなくなる。常日頃自分の身の回りの世話まで人任せにしている実態が、一人暮らしへの自信のなさへつながっているとも言える。家事の中でもまとめてしなくてすむ、例えば「寝具の用意や手入れ」、「衣替え」、「ボタン付け」、「食事の後片づけ」などは、せめて自分でするように本人も心がけるべきであるし、家庭でも家事分担させて日常生活の中でより多くの経験をさせるべきと考える。表2に示したように、家族や友人に作ってあげられる料理名のほとんどが、家庭科で教わった教材であることがわかった。このように家庭科は児童・生徒・学生の中に、生活に密着した様々な「生きる力」を考える教科として根付いてきていると考えられる。最後に、アンケートの「しない」のバーができるだけ少なくなるべく我々はこれからも努力すべきと考える。そのためには、我々は学生を育てるのみならず、現場の教員との交流を深め、児童・生徒の実態を把握し、協力し合う必要がある。なお、本アンケート調査の結果は、長野県家庭科教育研究会 50周年記念大会 (平成16年11月13日、信州大学で開催) で報告した。

## 5. まとめ

「家庭科」の男女4単位必修時代から早や十年が過ぎようとしている。このような時代の中で家庭科教育を受けてきた児童・生徒・学生にどのような「生きる力」がついているかを知ることが目的とし、長野県の北信地方の小学生から大学生を対象とした日常生活の自立度についてアンケート調査を行った。調査対象は、小学校3校（6年生）の男子83名、女子81名（小計164名）、中学校1校（2年生）の男子40名、女子40名（小計80名）、高等学校3校（1年生）の男子93名、女子66名（小計159名）、家庭科の教員養成課程の大学2校（2年生～4年生）の75名（女子のみ）の計480名に対し、「日常生活の自立度」のアンケート調査を行った。調査実施期間は平成16年6～7月であった。

達成度を5段階評価した15項目を用いて、男女差、学校差を求めたところ、同一学年間では有意な男女差、学校差は認められなかった。さらに、小学校、中学校、高校と、自宅通学者の大学生の自立意識の頻度分布図間には有意な相関関係があるが、アパートか寮に住んでいる大学生との間には相関関係がなかった。また、「自立意識」と「各項目」間、「学年」との間には正の相関関係があることから、学年が上がるにつれ生活の自立意識ができていくが、それは一人暮らしをして初めて確立されることがわかった。家事手伝いは男女ともに小学校から高校にかけて行わなくなり、家事すべてを母親に依存することが多いことがわかった。自立への第一歩として、まとめて行わない家事については、自分で行うようにすべきであることがわかった。家族や友人に作ってあげられる料理名は、そのほとんどが「家庭科」で扱う教材であった。生活経験の少ない児童・生徒・学生にとって、家庭科での学習は大きなウェイトを占めていると考えられた。

## 6. 引用文献

- 1) 家庭科、なぜ女だけ！—男女共修をすすめる会の歩み—（1978）家庭科の男女共修をすすめる会、ドメス社、東京、1-281
- 2) 男女共学 技術・家庭科への実践（1979）産業教育研究連盟、民衆社、東京、1-152
- 3) 資料から見る戦後家庭科のあゆみ—これからの家庭科を考えるために—（1991）朴木佳緒留・鈴木敏子、学術図書出版、東京、104-170
- 4) 長野県家庭科教育研究会 50年史（2005）長野県家庭科教育研究会、11-17
- 5) 長野県家庭科教育研究会 50周年記念大会要項—アンケート調査要旨—（2004）長野県家庭科教育研究会、11
- 6) 新しい家庭科教育—男女共修の新時代を迎えて—（1993）伊藤央子・石川尚子・林隆子、教育図書、1-31
- 7) 児童・生徒の家庭生活の意識・実態と家庭科カリキュラムの構築—家庭生活についての全国調査の結果—（2001）牧野カツコ、平成13年度科学研究費基盤研究（A）（1）、課題番号13308005 研究報告書、日本家庭科教育学会、表番号1001、123

（2004年12月14日 受理）